

总主编 谭晶华

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材

日语语法 句法与篇章法

吴大纲 编



W 上海外语教育出版社
外教社 SHANGHAI FOREIGN LANGUAGE EDUCATION PRESS

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材
总主编 谭晶华

日语语法 句法与篇章法

吴大纲 编



图书在版编目 (CIP) 数据

日语语法: 句法与篇章法 / 吴大纲编.

—上海: 上海外语教育出版社, 2007

(新世纪高等学校日语专业本科生系列教材)

ISBN 978-7-5446-0152-8

I. 日… II. 吴… III. 日语—语法—高等
学校—教材 IV. H364

中国版本图书馆CIP数据核字 (2006) 第074772号

出版发行: 上海外语教育出版社

(上海外国语大学内) 邮编: 200083

电 话: 021-65425300 (总机)

电子邮箱: bookinfo@sflep.com.cn

网 址: <http://www.sflep.com.cn> <http://www.sflep.com>

责任编辑: 应 允

印 刷: 上海市印刷三厂

经 销: 新华书店上海发行所

开 本: 890×1240 1/32 印张 7.5 字数 203千字

版 次: 2007年3月第1版 2007年3月第1次印刷

印 数: 3 500 册

书 号: ISBN 978-7-5446-0152-8 / H · 0059

定 价: 11.00 元

本版图书如有印装质量问题, 可向本社调换

新世纪高等学校日语专业本科生系列教材编委会

总主编:

谭晶华

编委:(以姓氏笔画为序)

王 勇	浙江工商大学
王健宜	南开大学
叶 琳	南京大学
皮细庚	上海外国语大学
许慈惠	上海外国语大学
纪太平	厦门大学
杨拙人	广东外语外贸大学
严安生	北京外国语大学
吴 侃	同济大学
吴大纲	上海外国语大学
陈 岩	大连外国语学院
张 威	清华大学
陆留弟	华东师范大学
庞志春	复旦大学
胡振平	解放军外国语学院
修 刚	天津外国语学院
洪栖川	东北师范大学
高 宁	华东师范大学
高文汉	山东大学
宿久高	吉林大学
谭晶华	上海外国语大学

总序

21 世纪是一个国际化的高科技时代,也是一个由工业社会进一步向信息社会转化的时代。科学技术的高速发展、新兴交叉学科的涌现、人文文化与科学技术间的相互渗透和融合、社会的信息化以及知识、信息传播技术的日新月异加强了世界各国文化的交流、碰撞与合作。要想在激烈的世界竞争中立于不败之地,就要占领人才培养的制高点,培养出世界一流的高素质、高水平人才。

由于社会对外语人才的需求已呈多元化趋势,以往那种单一外语专业的基础技能型人才受到挑战。今后我们仍然需要培养《源氏物语》的专门研究家,但是高校外语专业的教学必须从过去的“经院式”人才培养模式向宽口径、应用性、复合型人才培养模式转化。社会要的不光是懂外语的毕业生,还需要思维敏捷、心理健康、知识广博、综合能力强的精通外语的专门人才。

我国的外语教学界已充分认识到,对国家建设发展急需的外语专业人才加大培养力度,提高其能力和素质是一项迫在眉睫的任务。随着我国日语专业教学点设置的不断增加和招生规模的逐年扩大,日语专业本科生的教学改革、学科建设及教材出版亦取得不小的成绩,各地先后出版了一批在全国有影响的优秀教材。正因为社会对日语人才的培养提出了更高的标准,同时对日语学科的建设也提出了新的要求,因此,日语本科生教材的编写和出版也应该顺应潮流,开拓创新。

我国外语教材和图书出版的基地、领头羊之一的上海外

语教育出版社(外教社)以高度的责任感和高瞻远瞩的视野,在充分调研的基础上,抓住机遇,在2003年8月邀请了全国主要外语院校和教育部重点综合大学日语专业的近二十位专家,在上海召开了“全国高等学校口语专业本科生系列教材编写委员会会议”。代表们完全认同编写“新世纪日语专业本科生系列教材”的必要性、可行性及紧迫性,并对编写立意、教材构建、编写审校程序提出了许多积极、中肯的建议和要求。之后,外教社又多次召开全国及上海地区专家学者会议,分头撰写编写大纲,确定教材类别、项目,讨论审核样稿。经过两年多的努力,终于迎来了第一批书稿的付梓。

本套教材共分语言知识、语言技能、语言学与文学、语言学与文化、语言学与翻译(中日对译)、人文科学、经济贸易、测试与教学法等若干板块,可以说几乎涵盖了当前我国日语专业所开设的全部课程。编写内容根据因材施教的原则,深入浅出,反映各个学科领域的最新研究成果;编写体例采用国家最新有关标准,力求科学、严谨;编写思想贯彻了在帮助学生打下扎实的语言基本功的基础上,培养学生分析和解决问题能力的原则,全面提高学生的人文、科学素养,使其养成健康向上的人生观,成为合格的外语专门人才。

本套教材编写委员会云集了我国日语界的学者专家,其中不少是高等学校外语专业指导委员会的委员。每一种教材均由编写委员会的专家们仔细审阅后确定,有的是从数种候选教材中遴选,总体上代表了中国日语教材学发展的方向和水平。我们相信,外教社这套“新世纪高等学校日语专业本科生系列教材”的编写和出版,一定会促进和提高我国日语专业本科教学质量的稳步提高,其前瞻性、先进性和创新性也将为日语教材的编写拓展更为广阔的视野。

谭晶华

上海外国语大学副校长

2006年5月

前言

本书是专门为我校日本文化经济学院日语语言文学专业四年级学生所开选修课而编写的一本教材。已经试用过几个轮回,每次都有很大幅度的修改,至此有了这样的面目。去年递交后在年底通过了我校教务处的出版基金审查,在上海外语教育出版社的大力支持下,有了今天的出版。首先应该感谢他们。

有关日语语法的书,国内出版了很多,大多是追随日本国内学校语法体系的。中国国内日语教学事业发展到了今天的水准,学校语法体系就显得支离破碎,已经不能担任起科学地解释实际语言现象的重任来。譬如,语法学的内涵应该怎么来认识?这在传统的语法体系里面找不到正确的答案。因为视角不一样,视野也不一样,在原来的那个体系里面已经不能期待再有什么新的突破。

我们认为,语法学这一范畴里,应该包含形态学和统语学,统语学里还可以划分为词组学和句法学,句法学里再可以划分为独词句和二词句。句法讨论的主要对象应该是二词句,而二词句里,又可以分为单句和复句。只有在对句子有了这样充分的认识以后,对几个句子的组合,即篇章的讨论才成为可能。

这是仅从形态结构来看,如果再从意义层面来看,还应该看到,句子除了一个命题以外,还有一个说话人的语气问题。语气问题不是我们一般认为的语气,它有丰富的内涵,概括地说主要是指说话人对现实的一种认识和希求态度,

以及说话人对听话人的各种态度;具体地说应该包括各种句式以及时体、肯定否定、人称、敬简体等等。

我们在这里也谈品词,名词、动词、形容词、副词、接续词等等;也谈句子成分,主语、谓语、补语、状语。但对它们的定义与传统语法有着很大的不同,有时甚至所指内容也会是不同的。然而最本质的不同就在于前面所叙的不同上,这种不同是在语言认识上的不同,是语言观的不同。学生通过这本教材的学习可以了解到很多在以往的学习中没有思考过的问题,来深化自己的思维,这给无论是选择就业的学生还是选择继续深造的学生,都能提供一个自我提高的空间。这也是编写本书的初衷。

本书共分 13 章。第 1 章是序章,主要讨论句法、篇章法在语法学里的定位问题和内容梗概。我们在前面说过,语法学这一范畴里,应该包含形态学和统语学,统语学里还可以划分为词组学和句法学。但它们之间并不是相互孤立的,而是一种你中有我、我中有你的关系。这一点从本书的各章节的构成也能看出来。譬如,第 2 章首先讨论句子的内部结构,而接下来的第 3、第 4 章却讨论品词论,这是因为要理解句子的内部结构,就需要这样的形态学知识。在这个基础上我们在第 5 章再来讨论句子内部结构中的另一个重要组成部分——句子成分的强调。很难想象没有以上章节的讨论作铺垫,能把这里的内容说清楚。如果说到这里为止讨论的是内部结构的话,那么从第 6 章开始讨论的则是附在内部结构上的陈述性语气。把句法学的内涵粗略地概括为内部结构和其陈述性语气也不为过。而陈述性语气也有一定的形态,也可以说是其载体。第 7 章的终助辞、第 8 章的感叹词也就是这种载体的一个重要组成部分。如果说到第 8 章为止主要讨论的是单句的话,那么第 9 章、第 10 章讨论的是复句,第 11 章是句群,即篇章。然后在第 12 章里再来对迄今为止所涉及到的形态学里的重大理论问题作

一个提示和归纳,形成一个句法与篇章法的理论体系。最后,谈一点日语语法史知识,把我们这里讨论的语法体系的来龙去脉介绍一下。

本书立足于精确地阐释具有现代语言学高度的语法知识体系这一宗旨,采用日语撰写的形式。并且每个单元对重点学术概念和要点均编有练习,这些练习题不仅能检验是否完全理解课文内容,还是对课文内容的有效补充和扩展,要正确解答并非易事。本教材也适用于尚未修过本课程的研究生,对提高语法功底相信定能有很大帮助。

本书主要根据『文法と文法指導』、『日本語文法』以及『日本語文法・形態論』的内容改编而成。另外在编写过程中还参照了『日本文法論』、『標準日本口語法(改訂版)』、『国語学原論』、『国文法体系論』、《现代日语动词意义的研究》等著作,具体版本已在最后的参考文献里注明。

吴大纲 于寓所沧浪楼

2006年4月

目 次

第1章 序 章

1.1 文法論の中身	1
1.2 統語論とは何か	2
1.3 一語文と二語文	3
1.4 文論と形態論・連語論との関係	3
1.5 文の内部構造	4
1.6 複合文のタイプ	5
1.7 文の陳述について	6
1.7.1 気持ち	8
1.7.2 時	10
1.7.3 みとめ方(肯定=否定)	11
1.7.4 人称	13
1.7.5 ていねいさ	16
練習問題	18

第2章 文の組み立て

2.1 文の拡大	20
2.2 文の部分の種類	21
2.2.1 主語と述語	21
2.2.2 補語	22
2.2.3 修飾語	24
2.2.4 状況語	25

2.2.5 規定語	26
2.2.6 陳述語	27
2.2.7 獨立語	28
2.2.8 側面語	28
2.2.9 題目語	28
2.3 主語と述語	29
2.3.1 主語と述語の意味的な関係	29
2.3.2 主語になる「～は」と「～が」の形	30
2.4 文の部分の省略	32
2.5 文の他の構成要素	34
2.5.1 述語文と獨立語文	34
2.5.2 語順	35
2.5.3 イントネーション	35
練習問題	36

第3章 補助的な品詞

3.1 補助的な品詞とは	43
3.2 補助的な品詞の種類	43
3.2.1 コピュラ(コプラ、結び、繫辞、連辞)	43
3.2.2 後置詞	48
3.2.3 つきそい接続詞	50
練習問題	51

第4章 品詞

4.1 品詞とはなにか	53
4.2 品詞にとっての意味・機能・形態	53
4.2.1 品詞における意味と機能と形態の関係	54
4.2.2 品詞らしさと意味・機能	54
4.3 主要な品詞と名づける意味を持たない品詞	56
4.3.1 主要な品詞と、名づける意味を持つ	

たない品詞	56
4.3.2 補助的な品詞	58
4.4 品詞の種類わけ	58
4.5 品詞の転成	59
4.5.1 転成とは	59
4.5.2 個別的な転成と一般的な転成	59
4.5.3 転成のタイプ	59
4.5.4 生産力のある転成	61
練習問題	62

第5章 文の部分のとりたて

5.1 とりたて	64
5.1.1 とりたてとは	64
5.1.2 とりたて形のつくりかた	65
5.2 注意すべきとりたて形の用法	65
5.3 とりたて形式の用法	66
5.3.1 「は」によるとりたて	66
5.3.2 「も」によるとりたて	67
5.3.3 「こそ」によるとりたて	69
5.3.4 「さえ」によるとりたて	70
5.3.5 「しか」によるとりたて	70
5.3.6 「でも」によるとりたて	71
5.3.7 「くらい(ぐらい)」によるとりたて	71
5.3.8 「ほど」によるとりたて	72
5.3.9 「だけ」によるとりたて	74
5.3.10 「ばかり」によるとりたて	78
5.3.11 「など」「なぞ」「なんぞ」「なんか」 によるとりたて	79
5.3.12 「なんて」によるとりたて	80
5.3.13 「まで」によるとりたて	80

練習問題	80
------------	----

第6章 文と陳述——述語の形式——

6.1 文の内容とのべかた	84
6.2 文ののべかた	84
6.2.1 のべたてる文、たずねる文、働きかける文	84
6.2.2 のべかたの変容	86
6.2.3 いいきる文、おしはかる文	88
6.2.4 文のとき	88
6.3 モダリティ	89
6.4 いろいろな述語の形式	89
6.4.1 推定、伝聞などを表す述語	90
6.4.2 条件形や中止形に「よい(いい)」「いけない」 「ならない」「ほしい」をくみあわせ てつくる述語	92
6.4.3 連体形と「ほう」「はず」「わけ」「もの」 「こと」などの形式名詞をくみあわせ てつくる述語	95
6.5 陳述副詞とモダリティ	107
練習問題	108

第7章 終助辞

7.1 終助辞とはなにか	113
7.2 終助辞の意味・用法	114
7.2.1 「よ」	114
7.2.2 「ね」	115
7.2.3 「さ」	117
7.2.4 「わ」	118
7.2.5 「ぞ」	120
7.2.6 「ぜ」	121

7.2.7「な」(男性語としての「な」である)	123
7.2.8「とも」	124
7.2.9「もの」	125
7.2.10「こと」	125
7.3 接続助辞の終助辞的な用法	125
7.3.1「から」	125
7.3.2「け(れ)ど」	126
7.3.3「のに」	126
7.4 性差と終助辞	126
練習問題	127

第8章 感動詞

8.1 感動詞とはなにか	130
8.2 感動詞の種類	130
8.3 感動詞の諸性格	132
8.3.1 感動詞による独立語	132
8.3.2 感動詞の自然性と言語性	133
8.3.3 感動詞とていねいさ	134
8.3.4 うけこたえの感動詞の性格	135
8.3.5 働きかけの感動詞の性格	136
8.3.6 あいさつの感動詞の性格	137
練習問題	139

第9章 あわせ文(複合文)(一)

9.1 あわせ文	140
9.2 重文	140
9.2.1 重文のタイプ	140
9.2.2 重文の働きのまとめ	142
9.2.3 重文と複文のあいだ	143
9.2.4 先行節の陳述性	143

9.3 規定語節・主語節・補語節・述語節・修飾

語節・状況語節を持つ複文	145
9.3.1 規定語節	145
9.3.2 主語節・補語節	146
9.3.3 述語節	147
9.3.4 修飾語節	148
9.3.5 状況語節を持つ複文	149
練習問題	151

第10章 あわせ文(複合文)(二)

10.1 条件節・譲歩節を持つ複文	157
10.1.1 条件節・譲歩節を持つ複文の性格	157
10.1.2 条件節の用法	161
10.1.3 譲歩節の用法	164
10.2 複雑なあわせ文	166
10.3 ふたまた述語文	168
練習問題	169

第11章 文と文の関係

11.1 接続詞とはなにか	172
11.2 接続詞の種類	172
11.3 接続詞への転成	177
11.3.1 接続詞の出発点	177
11.3.2 接続詞のタイプ	178
11.4 接続詞の機能	181
11.4.1 節と節との接続	181
11.4.2 文と文との接続	183
11.4.3 単語と単語との接続	186
11.5 接続詞の種々の意味	187
11.6 接続詞と陳述副詞の違い	188

11.7 自己中心的な言語要素とダイクシス	189
練習問題	191
第 12 章 文法的なカテゴリーと文法的なてつづき	
12.1 語形変化と文法的なカテゴリー	196
12.1.1 語形と語形変化	196
12.1.2 文法的なカテゴリー	196
12.1.3 曲用と活用	197
12.1.4 とりたて	201
12.2 語形つくりのてつづき	203
12.2.1 屈折と膠着	203
12.2.2 語幹、語尾、接辞	204
12.2.3 その他の語形つくりのてつづき	204
12.2.4 語構成(単語つくり)のてつづきについて	205
12.2.5 語構成論から借りた概念	206
12.2.6 総合形と分析形	207
12.3 動詞の語形つくりのてつづき	207
練習問題	209
第 13 章 日本語文法研究の歴史と問題点	
13.1 日本語文法研究の歴史	213
13.2 橋本文法と時枝文法の文論	217
練習問題	219
参考文献	220

1.1 文法論の中身

言語の構造の中の文法の側面を研究対象とする言語学の部門を文法論(文法学)というが、文法論は複雑に分化発達している文法の構造を全面的に明らかにするために、いろいろな分野に分かれている。

文法論は大きく形態論(Morphology)と統語論(Syntax)とに分けられている。

形態論は単語の文法的な側面を扱う分野である。統語論は単語から組み立てる際の文法的な側面を扱う分野である。文法論が形態論と統語論とに分けられるのは、基本的には言語に単語と文という単位があって、その間の相互関係・相互作用の過程で、文法の構造が分化発達してきているという事情に基づく。単語と文とが互いに他を前提として存在するのに対応して、形態論と統語論とは補い合って、文法の構造を全面的に明るみに出そうとする。

例えば、単語は文の中で使われた姿で存在するが、形態論は、その単語を文の中から取り出し、文の材料としての単語の文法的な側面を整理して扱う。統語論は、文と単語の組み合わせという統語論独自の単位の文法的な側面を扱うことになるが、これらは単語を材料として組み立てられたものであって、そこでは単語はそれらの組み立てに使われた姿のまま扱われる。非常に大まかな言い方をすれば、形態論は材料の文法的な側面を扱い、統語論は構成物の文法的な側面を扱うということになるだろう。材料と構成物とは密接に関連するが、別物である。